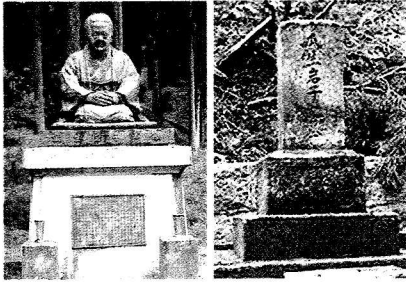


故郷・喜多方の

瓜生岩子の

史跡をたずねて



森閑とした境内には、銅像と渋沢栄一の書による墓碑が静かに佇んでいる

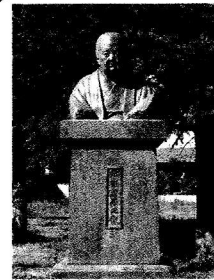
五十一歳の時、長福寺を借り、裁縫教授所を開いて婦女子の自立を助けた



版画家斎藤清画伯が揮した顕彰碑



長福寺改修前(上)と現在(下)



生誕の碑(北町)



喜多方市立 [蔵の里] 内 瓜生岩子記念館

喜多方

かつて会津藩領の北部にあり「北方」と呼ばれていましたが、明治8年、「喜び多いまち」喜多方となりました。



瓜生岩子記念館

岩子さまらしい質素な記念館ですが
尊いご足跡と温かさに充ちた感動の空間です

瓜生岩子記念館は、歴史を重ねた蔵々を一堂に集めた「蔵の里」内にあります。穀物蔵を利用した小さな空間ですが、岩子さまにふさわしく、温かさ、やさしさに満ち、「まるで母や祖母に会っているよう……

なぜ、こんなにも懐かしいの？」

そんな声まで聞かれます。

町にも、岩子さまのお心を継いだおばちゃん、おかちゃんがいっぱい。

「蔵のまち・喜多方」へ、ぜひお出かけください。



年 (西暦)	年齢	事績等
文政 12 (1829)		父・利左衛門、母・リエの間に岩子誕生
天保 8 (1837)	9	父が急死、家が火災に遭う
" 13 (1842)	14	母弟と熱塩の母の実家 山形屋に身を寄せる
弘化 2 (1845)	17	御番医師の叔父 山内春璣宅に行儀見習にでる
" 2 (1845)	"	佐瀬茂助と結婚、呉服商・松葉屋を営む
" 2 (1845)	"	一男三女に恵まれる
安政 2 (1855)	27	叔父 春璣死去
" 3 (1856)	28	夫 茂助、病に伏す
文久 1 (1861)	33	茂助 死亡 (40 歳) 子ども四人を他家に託す
" 2 (1862)	34	母 リエ 死亡
元治 1 (1864)	36	店をたたみ小田付 (喜多方) に転居
慶応 4 (1868)	40	戊辰戦争の際、若松に駆け付け戦傷者の手当にあたる
明治 2 (1869)	41	旧藩士の子弟のため小田付幼学校を開く
" 4 (1871)	43	幼学校を閉じ、東京・深川の救養会所に学ぶ
" 5 (1872)	44	小田付に戻り救養会所津支部の設立に奔走
" 5 (1872)	"	女性たちに自宅で裁縫、機織りを教え、生活困窮者の支援を続ける
" 12 (1879)	51	下岩崎の長福寺を借り、裁縫教授所を開く
" 15 (1882)	54	三島通庸と知り合う
" 20 (1887)	59	県知事 平田折内の勧めをうけ福島長楽寺門前に転居
" 21 (1888)	60	村々に教育会の設立をうながし、堕胎・棄児の防止に努める
" 22 (1889)	61	水飴製造を改善、飴粕の利用法を県内を伝授普及して回る
" 24 (1891)	63	福島教育所の設立が認可される
" 24 (1891)	"	国会に「婦人慈善記章の制」を請願
" 24 (1891)	"	東京養育院幼童部世話掛長となる (8 か月間)
" 24 (1891)	"	若松に育児会、喜多方に産婆研究所を設立する
" 25 (1892)	64	福島に瓜生會を結成する
" 26 (1893)	65	喜多方・坂下に育児会できる
" 26 (1893)	"	鳳鳴會に福島愛育園の前身となる育児部を設置する
" 27 (1894)	66	若松に私立済生病院を開院
" 27 (1894)	"	東京下谷で水飴製法と飴粕利用を伝授
" 27 (1894)	"	瓜生會支部 水飴伝習所を設立する
" 28 (1895)	67	日清戦争の傷病兵救護用に水飴 30 貫を寄贈する
" 28 (1895)	"	包帯の裁ち肩をつむいで記念織をつくり昭憲皇太后に献上する
" 29 (1896)	68	藍綬褒章受章
" 29 (1896)	"	三陸津波被災者のためバザーや募金を行なう
" 30 (1897)	69	防寒軍衣の製造で奔走する
" 30 (1897)	"	4月19日福島で死去

※ 年齢は数え年

大きな感銘と深い悲しみをこめて 浅草寺に銅像を設立

東京養育院院長 渋沢栄一翁

岩子さまの早すぎる死を悼み、多くの賛同者とともに浅草寺境内に素晴らしい銅像を残してくださいました栄一翁。その静かに微笑む岩子像は、私たちに社会福祉の大切さを考えるきっかけを与え、美しく生きるための心の拠りどころとして、いまでも鮮やかに輝き続けています。



東京浅草寺 瓜生岩子像



【写真所蔵：
渋沢史料館】

岩子像の台石正面には歌人・下田歌子の撰文を刻む

岩子さんは、ほんとうに仏の生まれかわりです。会津の山の中に生まれ、不幸な未亡人になったのに、その功績は数えることができないほどです。学校を建て、仏教を広め、いなかの悪い風習をなくし、育児会をおこし、病院をつくり、貧民を助け、兵士をなぐさめ、戦死者の遺族をいたわり、あるいは廢物を工夫して利用し社会に益をもたらすなど、一生すべて世を正し、善を積む働きでした。(わだよしおみ作『わがいは水あめの詩に』より)